

## 民主主義のコスト

統一地方選挙が近づいてきました。北海道でも、北海道知事選・道議選、札幌市長選・市議選という大きな選挙が行われます。

今回の統一地方選挙では、地域経済の活性化、子育てや少子化対策、医療や福祉対策などの外、議会改革が大きな争点になるものと思われます。

去年は、名古屋市や鹿児島県阿久根市のように、首長と議会が激しく対立する様子が度々報道されました。

阿久根市の竹原市長さんはリコールが成立して失職し、結局、その後の選挙では返り咲きできませんでしたが、名古屋市の河村市長さんは議員定数や議員報酬の大幅な削減をはっきりと公約に掲げて選挙戦を戦い、再選されました。

こうした一連の経過の中で、地方議会の在り方について関心を持たれた方も多かったと思います。

今は、議会や議員にとって、非常に厳しいアゲインストの風が吹いているといえます。

その背景を考えると、大きくは

- ・ 議会と地域住民の距離が遠いこと
- ・ 議会の自浄作用が働いていないということ

という二つのことが考えられます。

まず、議会と地域住民の距離ということについて見ますと、住民の皆さんは、議会がどういうところなのか、どういう活動をしているのか殆どご存じないと思います。

私は、かつて道庁で勤務しておりましたから、道議会のことはよく承知していますが、札幌市議会のことになると、新聞などで報道される範囲に止まっているのが現実です。

そこには、情報提供の在り方など議会側の取組の問題もあるでしょうが、同時に、地域住民の多くが議会活動に対して関心を持つていないところにも原因があると思います。

次に、議会の自浄能力について見ますと、そもそも、痛みを伴う改革に自ら取り組むというのは、よほど改革への意識・信念をしっかりと持っていなければできないことです。そういう意味では、議会改革を議会自身に求めることは酷というものでしょう（半分皮肉も込めておりますが…）。

やはり外圧が必要で、その外圧こそ有権者たる地域住民の皆さんの意志ということになります。

こうした中、議会と地域住民との距離が非常に遠いということもあって、首長が議員定数削減など議会改革を声高に叫ぶと、それに共感する有権者も多かろうと思います。自分に痛みが及ばない限り、人は誰でも大胆になれるものですから。

議会は、住民の代表者によって構成され、住民の立場から首長の行政運営を牽制する役目を負っている以上、その在り方については、住民の皆さんが自身の問題として捉え、考えていく必要があります。

勿論、私も、議会の仕組みや活動の在り方が今のままで良いとは思っておりませんが、首長が「自分の意に沿わないから議회를解散する。財政が厳しいから議員の数は半分にする。大事なことは住民投票で決めれば良い。」というのは、いささか乱暴のように思います。

多数決も、「少数意見に如何に耳を傾けるか」ということがなければ、単なる数の横暴に陥るでしょう。

首長が、自分の政策を通していくためには、反対派や少数派の皆さんに対する説得、根回しなど手間暇がかかるものです。その手間は、程度にもよりますが、議会制民主主義を維持していくための止むを得ざるコストといえるのではないのでしょうか。

議会は、首長と同じく一方の住民代表なのですから、その本来の機能をどうすれば十分果たすことができるのか、また、機能を果たすためには議会はどうあるべきか、地方分権・住民自治を推し進めていこうとする今こそ、一人ひとりがしっかりと考え、貴重な一票を行使していきたいものです。（塾頭 吉田 洋一）